

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

共生社会に生きる

小田原市立城山中学校

三年 岡本彩佳

私の母は生まれつき聴覚に障がいを持っている。普段は補聴器を使って音を聞き、会話している。それでも完全に健聴者と同じレベルの聴力を持てるわけではない。

母と過ごして一番感じる事。それは、共生社会への理解が薄いことだ。例えば買い物をする時、レジ打ちしながら「レジ袋は要りますか？」と尋ねられても、レジの機械音や袋の音など、意外と騒音が多いスピーカーでは聞き取ることが難しい。マスクが欠かせない今、会話の手助けとなっていた口話は使えない。だから、よりはつきり話す等の話し方への配慮は必要だ。

他にも共生社会について感じることはいくつもある。例えば病院での呼び出しや、電車の

アナウンスなど……。共通してみられるのは、文字で伝えることが足りていないことかなと感じた。

しかし、そんな私の見方を変える出来事があった。昨年夏に開催された東京オリンピックの閉会式に、開会式ではなかった手話通訳の方の姿があった。ろう者の方が要望を出したそう。

ここで私には疑問に思うことがあった。なぜ字幕だけでなく手話通訳が必要なだろう。調べてみると様々なことが分かった。まずろう者の多くが第一言語を日本語ではなく手話としていたため、字幕を正確に理解することが難しい方がいることだ。例えると英語の音声と英語の字幕で理解するようなものだ。また中継の場合、字幕入力を出すと同時に進行のため字幕の表示はどうしても遅れてしまう。ここでも字幕だけだと臨場感を味わうことができないという問題が発生してしまうのだ。これも例えると、英語の演出を遅れて表示される日本語の字幕で楽しんで下さい、というような理由から、字幕も手話通訳もどちらも必要なのだ。

閉会式で手話通訳をされていた方のうちの一人は、私が母を通じて知り合った方の息子さんだった。豊かな表情とリアクションで、健聴者が見ていても楽しくなる手話通訳だった。閉会式後のSNS上では、「手話の人」がトレンド入りするくらいの注目が手話に集まっていた。「手話が好きになった」「楽しかった」「手話通訳の方、すばらしい」温かい声と称賛の声で溢れていた。中には、手話通訳の有無をチャンネルで変更できるのに、「手話通訳は分から

ないけど見ていて楽しいから」という理由で手話通訳ありで閉会式を楽しんだ健聴者も多かったようだ。手話や聴覚障がいに対する理解を深め、人々の心を惹きつけた三人の手話通訳の方に私は感動を覚え、忘れられない夏の思い出になった。

母の仕事は聴覚障がい者の方の悩みの相談を受けたり、聴覚障がいについての講座で講師として活動したりすることだ。聴覚障がいとどう向き合っていくのか。毎日たくさんの人のために活動する母の姿に私は憧れている。私は、小さい頃からたくさんの聴覚障がい者の方や手話通訳の方、要約筆記の方と触れ合う機会があった。言葉で、音に出して会話することは難しくてもジェスチャーや筆談で繋がることはできる。そんなことを学んだ。今考えてみると、貴重な経験をさせてもらっているなと思った。だからこそ、私には聴覚障がいとみんなを繋ぐことができると思う。伝えることができると思う。だから、この先どこかでみんなが聴覚障がいについての理解を深めることに繋がるような活動をしてみたいと思う。この世界が今よりもっと誰もが過ごしやすい共生社会になりますように。